

群 教 セ	G11 - 02
	平18.235集

# 進路実現への意欲を高めるクラス指導

— 生徒間の影響を利用した進路指導の工夫 —

特別研修員 吉沢 達也 (群馬県立伊勢崎商業高等学校)

## 《研究の概要》

本研究は、クラスを進路目標が明確な生徒「A群」と、それ以外の生徒「B群」に分け、B群の生徒に、A群の取組や成果を示すことで生じる生徒間の影響を利用し、全員の進路実現の意欲を高めることを目指したものである。教師の指示や指導だけではなく、生徒間の影響を利用することにより、自身の進路実現に向け何に取り組むべきかを考え、実際の行動に移すことができるようになることを明らかにしようとしたものである。

### I 主題設定の理由

本校では平成17年度より課題総合（総合的な学習の時間の名称）3年次3単位を実施し、生徒は各自の興味・関心、進路目標などをもとに選択した講座において学習活動を行っている。

しかし昨年度の課題総合理数講座（看護医療系を目標とする生徒を対象）を選択した生徒の中には、進路実現への意欲があっても数学の学力不足のために、数学を入試科目として課さない学校を選択せざるを得ないなど、進路選択の幅を狭めてしまう者がいた。そこで今年度は進路選択の幅を広げ、妥協しない進路選択をさせるために、生徒全員に数学の基礎的・基本的な学習内容を身に付けさせる指導を試みることにした。

また昨年度は、講座選択者全員にインターシップや学校説明会への参加を促したり、家庭学習の重要性を話したりするなど、進路や将来に対する働きかけを行った。しかし行動に移す生徒は、3分の1程度しかいなかったことから教師の指示や指導だけでは、生徒を行動に移させるのは難しいと実感した。進路に対してより具体的に考えたり、行動を起こさせたりするには、教師の指示や指導だけではなく、生徒間の影響を利用することが必要ではないかと考えた。

そこで今年度は、進路目標が明確な生徒（看護師志望生徒4名。以下「A群」と記す）に対して、授業とは別に積極的な働きかけを計画的に行い、他の生徒（以下「B群」と記す）にA群の生徒の取組や成果を示すなど、生徒同士が影響を与えたり受けたりする場面を意図的に作り出すことにした。

数学の学習内容を身に付けさせる指導とともに、B群の生徒に対してA群の生徒の取組や成果を示すことで、B群の生徒は影響を受け、結果として全員の進路実現への意欲を高められるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

### II 研究のねらい

課題総合理数講座の授業において、数学の基礎的・基本的な学習内容を身に付けさせる。さらにB群の生徒にA群の生徒の取組や成果を示し、A群の生徒から影響を受ける場面をつくる。これらにより、全員の進路実現への意欲を高めることができるということを明らかにする。

### III 研究の見通し

- 1 課題総合の授業において、問題の難易度を徐々に上げたり、類似した問題を数多く解かせたりすることで、段階的に学習内容を理解でき、学力が身に付くであろう。
- 2 A群の生徒に、授業とは別の場面で積極的な働きかけを計画的に行うことで、生徒間に競争意識が生じるであろう。
- 3 B群の生徒に、A群の生徒の取り組み状況や学習の成果を示すことで、彼らは影響を受けて意欲が増し、進路目標を明確にもてるようになるであろう。

## IV 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 「生徒間の影響」とは

他の生徒が、進路実現のために学習に取り組んだり体験活動などに参加したりする様子から、自らの進路に対する取組を振り返ること。さらに進路目標（将来の夢や職業）についてより深く考え目標を決め、その達成に向けて努力するなどの変化が現れること。

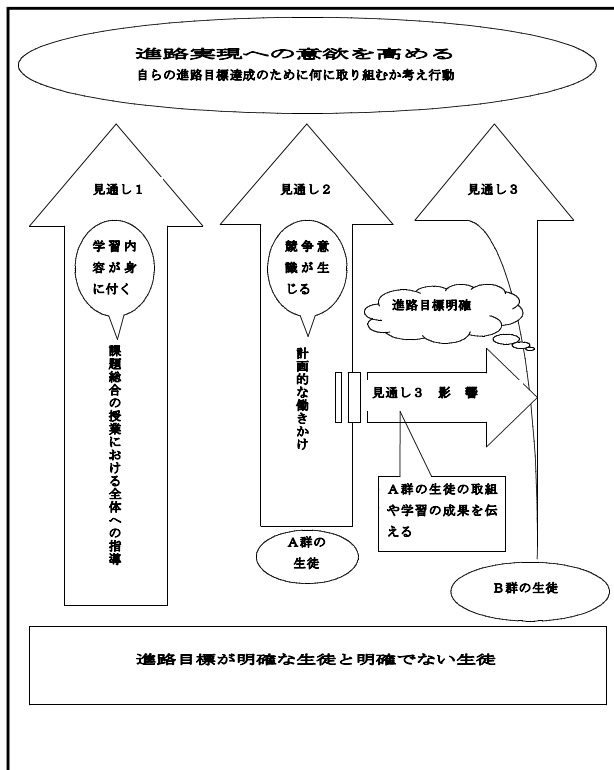
#### (2) 「進路実現への意欲が高まる」とは

学習するというだけでなく、インターシップや体験活動、学校説明会などに参加することも含む。自らの進路目標達成のために何に取り組むべきか考え、それを行動に移すこと。

#### (3) A群の生徒に対して「授業とは別に積極的な働きかけを計画的に行う」とは

B群の生徒にA群の取組や成果を見せるために行う。家庭学習課題の添削指導や夏期集中講義などB群の生徒に影響を与えるためのものであり、B群の進路に対する意識の芽生えを期待して行うものである。

#### (4) 全体構想図



### 2 実践の概要及び結果と考察

(1) 課題総合の授業において、問題の難易度を徐々に上げたり、類似した問題を数多く解かせたりする

ことで、段階的に学習内容を理解し、学力を身に付けることができたか(見通し1)

#### ア 実践の概要

課題総合の授業では、看護・医療系専門学校などで出題されることが多いため、数学Iや数学Aの学習を中心に行った。簡単な計算問題から徐々に難易度を上げ、文章・図形問題といった応用問題に取り組ませた。また出題の形式を変えずに、数値を変えただけの問題を多数(30~50問)解かせ、学習内容の定着を図った。

#### イ 結果と考察

4月中旬に実施したテストの平均点は58点であり、最高点は70点であった。6月下旬に同レベルのテストを実施した。平均点は74点、最高点は90点であった。

9月下旬に授業内容についてアンケート調査を行ったところ以下のような記述があった。

#### 資料1

##### 問題の難易度を少しずつ上げたのですが・・・?

- ・確率は自分の苦手なところだけ少しずつわかってきた。前は苦手なところになるとやる気がなくなってしまったけれど、今は意欲的になってきた。
- ・基礎を理解していれば、難しい問題でも、それを応用するだけなので理解しやすかった。
- ・最初の頃と比べると理解できていると思う。
- ・毎日の繰り返しが必要だと感じている。
- ・看護学校に進むにあたって数学に対し不安があった。しかし数学の基礎を勉強してきて少し自信がついた。

資料1から、難易度を徐々に上げた問題を解くことで、基礎的な内容を身に付ければ、応用問題も解くことができるということに気付くことができた。また、問題が解けたことで生徒が自信をもち進路や学習に対する不安解消につながるということがわかった。

#### 資料2

##### 類似問題をたくさん解いたのですが・・・?

- ・繰り返してやることによって、忘れていた部分などを思い出せた。
- ・解けば解くほど理解が深まった。同じような問題をたくさん解くことは効果があった。
- ・解き方のコツがわかった。だんだん慣れ

てきて少しずつでも身に付いている気がする。

・身に付いたものの方が多い。

資料2から、類似した問題をたくさん解くことで、解き方の手順や方法を身に付けることができ、理解も深められたと考える。数値を変えた問題を繰り返し解かせるなかで、生徒は時間内に終わらせようとしたり、正解数を競ったりしながら取り組む姿が見られた。

以上のことから、問題の難易度を徐々に上げたり、類似した問題を数多く解かせたりすることは、学習内容を身に付けることにおいて効果があったと考える。また進路に対する不安が解消されたり、学習に意欲的に取り組むことができたりするなど、心情面において、とても効果的であったと言える。

(2) A群の生徒に、授業とは別の場面で積極的な働きかけを計画的に行うことで、生徒間に競争意識が生じたか(見通し2)

#### ア 実践の概要

A群の生徒に以下の表1のように積極的な働きかけを計画的に行った。

A群の生徒に与えた家庭学習課題や夏季休業中の集中講義への参加は、目標が明確になれば、B群の生徒にも与えたり参加を認めたりすることを講座選択者全員に説明した。学校説明会や体験活動などの日程は掲示板に掲示し、B群の生徒にも示した。A群とB群の生徒を完全に分けて指導するのではなく、生徒が不公平感を抱かないように常に配慮した。

表1

時期	生徒への働きかけ※教師の意図・配慮
4月中旬	①個別面談をする ※講座選択者の進路目標を確認し、A群となる生徒を選ぶ
4月下旬より(毎日)	②家庭学習用の課題を与え添削指導をする ※家庭学習の習慣と自ら進んで学習に取り組む姿勢を身に付けさせる ※看護学校受験問題集から問題を選ぶ ※計算問題から文章題・図形問題と徐々に難易度を上げる ※添削指導をすることで、生徒と会話をする時間を意図的に作り、進路ガ

	イダンスを行う ③家庭学習課題の正解数を表にまとめ正解率を計算させる ※生徒に競争意識をもたせる ※単に順位ではなく、互いの良さを認め、称賛したり、励ましたりする
随時	④看護体験や看護学校説明会の情報を積極的に伝える ※それらに参加することを促す
7月中旬	⑤進路に関する夏休みの計画表を作成させる ※志望校の確定や、進路目標達成のプロセスをより具体的に考えさせる ※表を見比べさせることで互いに影響を与えあう場面をつくる
8月中旬	⑥集中講義を実施する ※看護学校などへの進学に向けた学習内容を定着させる

#### イ 結果と考察

表1①の結果

教室で課題をさせながら、1名ずつ廊下に呼び面談を行った。4名の生徒が看護師を目指したいという強い希望をもっていることがわかった。学習への意欲も感じられた。学力に大きな差はなく、目標も同じであるため、競争意識が生じやすく進路への意欲がさらに高められるのではないかと考え、この4名をA群の生徒と位置付け、指導を行うことにした。また、B群の生徒に影響を与えることもねらいとした。

表1②,③の結果

添削指導をしながら生徒と会話をしていく中で、家庭での学習時間が長くなった生徒や、与えた課題だけでなく自分で問題集を購入し問題を解く生徒が現れた。A群の生徒同士で正解数を比べたり、互いの解き方を比べたりする様子が見られた。その様子を見て、添削指導に加わりたいというB群の生徒からの申し出があった。

添削指導をしながらA群の生徒に、互いの取組を見てからの心境の変化について聞くと、資料3のようなものがあった。

#### 資料3

・みんな頑張っている。自分も見習うべきところがある。受かりたい気持ちが増した。

- ・他の人とライバル（同じ受験校）になる可能性が高かったので、負けずに頑張ろうという気持ちが強くなった。
- ・他の人に負けないように頑張っている。
- ・看護師になりたい気持ちが強くなった。

表1 ④, ⑤の結果

A群の生徒の看護体験や、看護学校説明会への参加希望を資料4にまとめた。B群の生徒へA群の参加状況を伝えることにより、その影響を受け、進路目標を考え始める契機になるのではないかと考えた。

看護体験は1日または2日間、地域の看護協会などから指定された病院で行われた。インターンシップは、ぐんまトライワーク推進事業により10日間実施した。実習先への受け入れ依頼や、事前打ち合わせなどは生徒が率先して行った。また、学習ノートの作成や礼状の発送も行った。

資料4 (A群生徒の夏休み計画表より)

A群生徒1 (准看希望)	A群生徒2 (高看希望)
准看説明会(前橋) 准看説明会(高崎) インターンシップ (病院)	看護体験(伊勢崎) インターンシップ (病院) 高看説明会
A群生徒3 (高看希望)	A群生徒4 (高看又は大学希望)
看護体験(伊勢崎) インターンシップ (病院) 高看説明会	看護体験(伊勢崎) 看護体験(前橋) 高看説明会 大学看護学部説明会

夏休みの計画表を互いに見比べさせた際の、A群の生徒同士の感想を資料5にまとめた。

資料5

- ・いろいろなことに参加し、すごいと思った。
- ・みんなやる気があると思う。
- ・他の人と多少は比較してみることも大切だと思った。
- ・〇〇さんのように、いくつもの説明会に参加し、学校の比較をすることが大切だと思う。

表1 ⑥の結果

A群の生徒のみならず、B群の生徒の参加もあり参加者全員が集中し、意欲的に取り組んでいた。講義中や休憩時に質問があったり、生徒同士で相

談して応用問題を解くなどの様子が見られた。

以上のようなことから、A群の生徒の中で互いをライバル視するような意識が生じたことがわかる。学習に関して、互いに向上していこうとする姿勢が見られた。また体験活動や学校説明会などへの参加状況を見ると、A群の生徒全員が進路に対してより具体的に考え、行動に移すことができたと言える。

また、家庭学習課題の添削指導後の様子や、同じ地区の看護体験に参加した生徒がいることから、同じ目標に向かって努力をする仲間意識が生じたのではないかとと思われる。

さらに、B群の生徒の中から添削指導や集中講義への参加申し出があるなど、A群の生徒から影響を受けたと思われる生徒が現れた。

(3) B群の生徒に、A群の生徒の取り組み状況や学習の成果を示すことで、彼らは影響を受けて意欲が高まり、進路目標を明確にもてるようになったか(見通し3)

#### ア 実践の概要

B群の生徒にA群の生徒の取組や学習の成果を伝えた。生徒への働きかけと、教師の意図・配慮を表2にまとめた。

表2

時期	生徒への働きかけ※教師の意図・配慮
4月下旬 より	①B群の生徒の前でA群に与えた添削課題を返却する ※B群の生徒の学習意欲を喚起させるために行う ※授業開始後すぐに課題を返却する ※返却時にはA群の生徒を称賛し、励ましの言葉をかける
6月下旬	②小テストを実施 A群生徒とB群生徒の平均点を比較する ※B群の添削指導や夏期集中講義への参加を促すため、A群の生徒が行っている添削指導の効果を示す
7月下旬	③進路に関する夏休みの計画表を作成する ※B群の生徒に計画表を作らせた後、A群生徒の計画表(学校名、企業名、体験先などは伏せたもの)を配布し自分のものと見比べさせ、数日後、

もう一度、B群の生徒に計画表を作らせる
※B群の生徒に進路目標を考える契機を与える
※B群の生徒は、A群の生徒が目標に向かい計画を立てている様子から、影響を受ける

## イ 結果と考察

表2①の結果

授業開始後すぐにA群の生徒に励ましの言葉をかけ、また称賛するなどして課題を返却した。そのような行為の後には、B群の生徒が集中して学習内容の説明を聞いたり、課題に積極的に取り組むなど、姿勢の変化が見られた。

B群の生徒は、A群の生徒の家庭学習に対する取組に影響を受けたと考える。

表2②の結果

A群の生徒の平均点(70点)とB群の生徒の平均点(48点)を算出し伝えたところ、翌週に、B群の生徒から、A群の生徒と同じように添削指導に加わりたいという申し出があった。集中講義の参加希望者も現れた。なぜ、添削指導や集中講義に参加したいと思ったのか理由を尋ねると「看護師志望の人は点数が上がっていて、少しあせっている。自分も頑張らなければと思ったから。」「添削指導に加われば成績が上がるかもしれないから。」との返答があった。

表2③の結果

B群の生徒に、A群の生徒の計画表(学校名や企業名、体験先等は伏せたもの)を見たときの感想を聞いたところ資料6のようなものがあった。

### 資料6

- ・私はどれだけ考えていないのだろう。もっと計画を立てて行動しようと思う。
- ・計画表がうまっていて、すごいと思った。
- ・学校説明会にたくさん出ていて自分の進路を考えていてすごいと思った。
- ・私も進路に向かって「行動しないと」と思った。

B群の生徒が作成した計画表を資料7にまとめた。B群の生徒に計画表を作成させ、A群の生徒の計画表を見せ、1週間後もう一度、計画表を作成させた。A群の生徒の計画表を見せる前と後で

比較すると、学校説明会や補習への参加計画が増えていることがわかる。

### 資料7 (B群生徒の夏休み計画表より)

B群生徒1	B群生徒2
専門学校説明会1 作業療法体験 <b>夏期集中講義</b>	大学説明会1 <b>大学説明会2</b> <b>英語補習</b> <b>小論文補習</b>
B群生徒3	B群生徒4
職場見学1 <b>職場見学2</b> <b>職場見学3</b> <b>検定補習</b>	専門学校説明会1 <b>インターンシップ</b> <b>専門学校説明会2</b>
B群生徒5	B群生徒6
<b>検定補習</b> <b>大学説明会1</b> <b>専門学校説明会2</b>	専門学校説明会1 <b>インターンシップ</b> <b>作業療法体験</b> <b>大学説明会2</b>

注: 小字=A群の計画表を見る前

大字=A群の計画表を見た後に加わった

例: 専門学校1=その生徒にとって1校目

担任教師からの指示や指導、クラスメイトなどからの影響もあったのではないかと考えられるが、資料6から、B群の生徒はA群の生徒が進路に対して具体的な行動に移している様子を目の当たりにしたことで、刺激を受け進路に関する計画の見直しを行ったと考える。B群の生徒にA群の生徒の進路に対する取組が影響を与えたと言える。

9月中旬に課題総合理数講座選択者全員に個別面談を実施した。教室で課題をさせながら1名ずつ廊下呼び面談を実施した。B群の生徒の中には、学校説明会や職場見学で配布された資料をノートに貼り付け、見学先の感想をまとめていた生徒がいた。進路に対してより具体的に考えようとする姿勢がうかがえた。

また、B群の生徒全員が計画通り説明会や補習に参加していたことがわかった。将来なりたい職業や取得したい資格などを考慮し、受験したい大学(学部・学科)専門学校を具体的に決めていた。

これらのことから、B群の生徒はA群の生徒から影響を受け、自分の進路について考え行動し、進路目標が明確となったと推察する。B群の生徒の進路目標が明確になりモチベーションが高くなったことで、授業への積極的な姿勢や態度が見ら

れ、クラス全体の雰囲気は良くなったと感じた。

## V 研究のまとめと今後の課題

### 1 研究のまとめ

課題総合理数講座の授業において、難易度を徐々に上げ問題を提示したり、類似問題を数多く解かせたことは、数学Ⅰや数学Aの基礎的・基本的な内容を身に付けることに効果があった。学習内容が身に付くことにより、進路に対する不安の解消につながり、意欲が高まるなど心情面にも影響があることがわかった。

A群の生徒に対して積極的な取組を計画的に行った。添削指導を通して一人一人とコミュニケーションを十分にとることができ、また進路に関する相談も効果的に行うことができた。添削課題の正解率の計算により、A群の生徒間で競争意識が生じ、学習意欲が向上した。また同じ目標に向かって努力をする仲間意識が生じ、進路目標について具体的に考え行動することにつながられたと考える。同じ目標をもつ生徒を集め、少人数で指導していくことは、進路実現という点で効果的であった。

B群の生徒は、A群の生徒の取組を見たことで刺激を受け、添削指導や集中講義への参加の申し出があったり、学校説明会や補習などへの参加が増えるなどの影響を受けた。その結果、進路目標を考える契機になり、目標が明確になった。B群の生徒の進路実現の意欲を高めるためにA群の生徒への積極的な働きかけを計画的に行ったことは、クラス全員の進路実現への意欲を高めるという点で効果的であった。

- ①進路目標が明確な生徒数名を一つのグループとする。
- ②他の生徒への影響をねらいとし、彼らに対して、積極的なアプローチを試みる。
- ③グループの成員同士で影響を与えあう場面を作る。
- ④他の生徒に、グループの生徒の取組や成果を示し影響を与えあう場面を作る。

生徒に不公平感を抱かせないように常に配慮しながら①～④を計画的に行うことで、教師の指示や指導ではなく、生徒同士が影響を及ぼしあい、進路実現への意欲が高められると考える。

### 2 今後の課題

本研究では、将来の目標が明確な看護師志望の生徒4名に対して添削指導を行い、その成果や、体験活動及び学校説明会への参加計画などを通して他の生徒に刺激を与える場面を作り出したが、別の方策も考えられる。

例えば、体験活動や、学校説明会などで気付いたことや学んだことを、互いに発表させたり意見交換をさせたりするなどである。そのような場を設けることで、参加できなかった体験活動などの情報を幅広く得ることができる。また発表などを通して自己理解を深め、進路実現への取組を、より促せたのではないかと考える。

本研究では生徒間の影響による効果を進路指導の場で活用したが、生徒に不公平感を抱かせないようにさらに配慮するなかで、進路指導だけでなく学級経営や教科指導、部活指導などの場面でも生徒間の影響という力を利用することができるのではないかと考える。

(担当指導主事 中西 信之)

#### Web検索キーワード

【進路指導 キャリア教育 進路実現 意欲  
クラス経営 影響】

#### <参考文献>

- ・群馬県教育研究所連盟 編 『実践的研究のすすめ方』 東洋館出版社(2001)
- ・全国高等学校進路指導協議会 編集 『高等学校ホームルーム担任のための進路学習ベーシックマニュアル』 実務教育出版(1997)
- ・鳥居 徹也 著 『フリーター・ニートになる前に読む本』 三笠書房(2005)
- ・三村 隆男 著 『キャリア教育入門』 実業之日本社(2005)
- ・宮城 まり子 著 『キャリアカウンセリング』 駿河台出版社(2005)
- ・吉田 辰雄 著 『キャリア教育論』 文憲堂(2005)